

国語教育と心意伝承研究との接点

—上原輝男氏の被爆時における「イメージ体験」に着目して—

梅光学院大学 秦 恭子

キーワード：上原輝男，心意伝承，イメージ，イメージ体験

0 研究の目的

本研究は、玉川大学において国語科教員養成に携わる中で、「民俗としての心性」(上原 1987)を追究する心意伝承研究を生かした国語教育を探究していた上原輝男(1927-1996)の思想をとり上げ、その形成過程に着目することを通して、心意伝承研究と国語教育との接点および両者を結ぶことの意義について明らかにしようとするものである。

心意伝承研究と国語教育は、それぞれ民俗学と国語教育学に属するテーマであり、両者の接点は一般的に言われていない。然しながら上原自身は門下生らに度々「二足の草鞋を履いているつもりはない」旨を伝えていたとい^{注1}、両者が上原の中で一元的に把握されていたことが伺える。また実際に難波(2003)や秦(2013)には、上原の国語教育実践が心意伝承研究を生かしたものであることが報告されている。しかし、上原の中で両者がどのような媒介項によって一つ事として捉えられていたのかを解く論考は未だ提出されておらず、上原の仕事は依然として民俗学と国語教育学の「二足の草鞋」の足跡として捉えられがちであり、両者を結ぶことの価値、国語教育学に民俗学の観点を導入することの意義についても十分な検討がなされていない。

したがって本稿では、上原の生涯を辿ることによって、国語教育研究と心意伝承研究を一元的に把握していたその視点を明らかにすることを目的として展開する。それを通して、両者を結ぶことの価値、すなわち国語教育研究の基盤に心意伝承研究の観点を導入することの意義について考察したいと考える。

考察にあたっては、遺稿集『曾我の雨・牛若の衣裳—心意伝承の残像』の巻末に収録された「上原輝男先生の経歴と研究の歩み」に基づいて、上原の生涯を以下の三期に区分して見ていくこととする。

●第Ⅰ期(1927-1957：誕生～玉川大学赴任まで)

国語教育学との出会い／広島における被爆／心意伝承論との出会い

●第Ⅱ期(1957-1991：玉川大学在職中)

心意伝承研究と国語教育研究の展開

●第Ⅲ期(1991-1996：玉川大学退職～死没)

心意伝承研究に基づく教育学(=基層教育学)の提唱

第Ⅰ期は、上原が広島高等師範学校に進学して国語教育の道を歩み始め、その矢先に被爆し、一命をとりとめた後に國學院大學大学院に進んで心意伝承論と出会うまでの区分である。第Ⅱ期は、上原が玉川大学において教鞭をとる中で、心意伝承研究と国語教育の実践研究とを並行して展開した時期である。また第Ⅲ期はそれらの集大成として心意伝承研究に基づく教育学(=基層教育学)のヴィジョンが提唱された時期である。

これら三期の区分のうち、殊に第Ⅰ期における被爆体験は、国語教育との出会いと心意伝承論との出会いの間に生じたものであり、のちに両者を引き合わせる要因を孕むものであると推測されるため、特に重点的に考察し、上原の生涯にわたる探究の原点を掴みたい。

なお考察における基礎資料としては、先の遺稿集巻末の資料に加え、上原の全著作及び大学講義記録、講演記録、また国語教育の実践研究の場であった「児童の言語生態研究会」^{注2}の研究授業や月例会の記録を用いることとする。

1 国語教育学との出会い

上原は、昭和2年10月3日、兵庫県丹波篠山(現・篠山市)にある霧深い城下町に、父・徳太郎、母・健の長男として生まれた。その後、篠山町立幼稚園、篠山町立篠山尋常高等小学校尋常科、兵庫県立鳳鳴中学校を順調に卒業し、昭和20年4月に、広島大学教育学部の前身である広島高等師

範学校の文科(卒業時は国語科)に入学している。

父母の生業が検番であったことから、播州歌舞伎の役者たちが公演のたびに訪れるという希有な環境に生まれ育った上原は、幼少期から歌舞伎の舞台に親しみ、小学生ながら国文学に傾倒する早熟な少年であったという。鳳鳴中学在学時、同校の国語科教師であり国文学者でもあった小島正敏が、勤労働員の際にもポケットに文庫本を忍ばせる上原に目を止め、国文学者への道を勧めた。上原はその勧めのままに、広島高等師範学校の文科に進み、そこで国語教育学に出会うことになった。

注3

2 被爆における「イメージ体験」

上原の人生が大きな転機を迎えたのは、広島高等師範学校に入学した昭和20年である。若者らしい気概と希望をもって国語教育への道をあゆみ始めたであろう上原の身を、原爆の惨禍がおそう。8月6日午前8時15分、エノラ・ゲイによって投下された原爆が、広島市上空600メートルで炸裂。上原はこのとき広島駅頭におり、爆心地からわずか1.7kmの地点でその爆風と熱線と放射線を浴びている。

戦後、この体験を上原が初めてまとまった形で公にしたのは、『忘れ水物語—ある被爆者の記憶』においてである。被爆後40年余りを経た昭和62年、還暦を記念しての出版であり、限定私家版であった(後、平成元年に主婦の友社から再出版)。同書は史実としての被爆体験の記述を中心としたものではなく、原爆を浴びて半死半生となった上原の心に蘇って上原を夢中にした在りし日の記憶、その心象世界を描写することに専念されたものである。

その中で上原が殊更に「事実」としてことわりを入れている箇所の記事によると、被爆した日の夕刻、上原は線路工夫風の男性に救出され、それから8日までのあいだ、仮説病院に充てられた広島駅裏の東練兵場に寝かされていた。そして翌9日に到着した呉の海兵団の救援隊によってわずかの治療をうけ、翌10日、戸板にのせられ同郷の学生たちに担がれて郷里に帰り、そこで奇跡的に一命をとりとめたのだという。

郷里での半年ほどの療養の後、昭和21年2月、上原は被爆の傷が完治するも待たずに復学し、

昭和23年には卒業論文をまとめ、広島高等師範学校を卒業している。

しかし、その後の足取りは決して、現場の一教員であることに止まるものではなかった。上原は教師としていくつかの高等学校を転々としながら、早稲田大学の聴講生となつてかぶき研究の郡司正勝(1913-1998)に師事し、その傍らで東京高等師範学校の研究科に進学する。そしてまた昭和27年には國學院大學大学院に進学し、折口信夫(1887-1953)に師事して道行^{註5}に関する研究を修め、さらに昭和29年には同大学院の博士課程に進学している。

被爆の後10年余りの自身のこうした足取りについて、上原は昭和51年に『望星』に発表した論文「方威諒直ノ心ヲ養ヒ清明正大ノ氣ヲ吐ク」の中で、以下のように述べている。

私は、往年の広島高師で有無をいわさぬ教員養成を受け、その真只中で原爆を浴びている。(中略-)身を焼かれることによって、それまで情熱と一つであった教育が、まるで白骨の如く、冷え切った呪文のように立ちはだかった。私はその呪縛から逃れようと、何度も方向転換を思いながら、そのくせ、それとは全くうらはらに、またぞろ、念の入ったことに、東京高師研究科に進んでいる。(中略-)呪縛された者相応の混乱と放浪の繰返しであったと思う。(上原1976:12)

上原が広島高等師範学校で受けた教員養成課程について詳しいことは分かっていないが、1982年9月18日に希望が丘教会附属めぐみ幼稚園(神奈川県横浜市)で行われた講演会の中で、上原は、入学した晩に寮の舎監室に集められ、黒板に「稚心を去れ」と書きつけられて、教員の道を歩むからにはまず己の幼心を捨てるよう厳しく躰けられたことを述懐している。そうした「有無をいわさぬ」教員養成課程の中で、上原は教育への志を「情熱と一つ」に抱いていた。それが被爆の境に「まるで白骨の如く、冷え切った呪文」のようになったというのである。しかし、その呪文は冷えて力を失い、上原を解いたのではなかった。それは立ちばかり、「呪縛」という言葉を選ばせるほどに方向転換を許さず、かえって上原を教育の道に縛りつづけたのであった。

では、被爆は上原にとってどのような体験であったのか。その点に分け入っていくための重要な資料として、先の『忘れ水物語』の巻末に付された「追い書き」がある。上原はその中で、以下のように語っている。

修羅の巷に、焼け爛れ、腐乱した五体を遺棄して、魂は既に拉致されていた。遠い遥かな此の国に旅立ちしたかのように、在りし日の記憶が、求めもしないのによみがえった。(-中略-)次々とあらわれる在りし日の在りし姿の方が、私を魅きつけて離さなかった。(-中略-)現代人は、それを妄想という。しかし、私たちの先祖の人々は、それをよみがえりと言った。よみがえりを死からの蘇生などというのは、現代人の錯誤である。よみがえりとは、果たして過去の記憶の再生をいう言葉であるかどうかを、私は疑う。私にとって、決してそれは妄想ではなかった。また断じて過去ではなかった。もし、魂という言葉が使えるならば、魂それ自体に働きがあって、未生に帰る作用のあるのを、よみがえりと人は曾ってそう実感していたのにちがいない。

私はひたすらに、懐郷心にかられていた。(-中略-)終焉の折に、人はふり返って思う過去の時間が人生だとしたら、あのひたすらな限りない懐郷心は一体何であるのか。たとえ、それが死に近い生命体の末期現象だと言われようとも、私にとって、あれは、決して終焉どころか始まりであった気がする。(上原 1987:243-244)

瀕死状態となって体外離脱を起こした生体に、「在りし日の記憶が、求めもしないのによみがえった」というこの体験は、アメリカの精神科医、キューブラー・ロスの研究(1971[原著 1969]・1977[原著 1975])を機に注目されるようになり、今日では一般的にも知られるようになった「臨死体験」に近似するものである。

もっとも、キューブラー・ロスは後に自身らが観察した臨死体験をもって死後の魂や「あの世」の存在の根拠としていくのであるが、上原は何もそうしたことを訴えているのではない。しかし、それは死に瀕した人間の脳がその終焉に錯乱して作り出す妄想や幻覚であるとする解釈や、単なる過去の記憶の放出であるとする考えには、異議を

唱えている。この点が重要である。

上原がここで伝えようとし、またさらに深く問おうとしているのは、主観的な体験としての臨死である。客観としての死後の魂や「あの世」の有無は、関心事ではない。死に臨んだ時、人間の心はどのような作用を見せるのか、それによって体験主体にどのような実感がもたらされるのか、そしてそれはその主体にとってどのような意味を持つのか。上原が見つめようとしているのはそうしたことである。

「魂という言葉が使えるならば」と断りつつ、上原は述べる。「それ自体に働きがあって、未生に帰る作用のあるのを、よみがえりと人は曾ってそう実感していたのにちがいない」。ここには二つのことが言われている。一つは魂(この言葉が危うく感じられるならば、これを「心」とか「意識」に差し替えばよいだろう)には未生へ帰る作用があるということ、今ひとつは、その作用にしたがった体験にかつての人々は「よみがえり」を実感し、そう呼び習わしていたに違いないということである。

引用の冒頭を見ると、一点目の作用は「拉致」という言葉によって把握されており、それが体験主体に非常に強い誘引力を感じさせるものであることが示されている。また続く文章では、一点目の作用は同時に「ひたすらな限りない懐郷心」、母胎に過ごした未生の、あるいは幼少の揺籃時を恋う強烈な念としても自覚されることが述べられている。過去の彼方からの強い誘引、またこちらからの切なる希求によって往時へと帰っていく。そうした作用が、人間の心には備わっているというのだ。「原子爆弾は、人間を原始に戻してしまう爆弾であった」(上原 1987:244)。『忘れ水物語』の追い書きの最後に、上原はそのようにさえ記している。原爆を浴びて瀕死となった上原はその作用によって、人生の絵巻物が巻き取られてゆくごとくに未生への回帰を体験したのである。

二点目は、その体験のもたらす実感や意味についてである。未生への回帰は、上原に退行や終焉の感覚を与えなかった。それどころかむしろ「始まり」を実感させた。現代人は「よみがえり」を死からの蘇生としてだけ捉えているが、それは錯誤であって、本来その言葉は何よりもまず未生への回帰あるいは幼心の蘇生を意味するものであり、

殊にその体験に没我することによる生命の更新や活性化の実感を指すものであったというのである。先の希望が丘教会附属めぐみ幼稚園における講演会の中でも、上原は、自分はその体験を経て「新しい生命を得た」のだと語っている。^{注5}

原爆それ自体は決して肯定できるものではない。それは当然のことであり、被爆体験がこの上なく無惨なものであることもまた言うまでもないことである。しかし、被爆によって凶らずも与えられた臨死の体験とそれが主体にもたらした積極的な意味を、上原は重視したのである。

ここで注目したいのは、臨床心理学者の田嶋誠一(1951-)が、上原のこうした体験を「生体がある種の極限状態で発動する、特殊な『イメージ体験』の一つである」と捉えていることである(田嶋 2011:171)。

田嶋によると、人間のイメージは、直接的で実感的なものと同抽象的で概念的なものに大別される。そのうち心理療法にとって重要なのは前者のイメージ、中でも特に外界の模写としてのイメージではなく、個人の内界の表れとしてのイメージであり、人間はそれを深く体験することによって、自己治癒力や自己成長力が引き出されるのだという。「イメージ体験」とは、そうした個人の内的現実の表れとしてのイメージが、それを想起している本人によってごく深く体験される状態を表す言葉であり、「イメージの自律的な動きに身をまかせ、イメージ場面を受容し、いわばイメージとそれを浮かべ眺めている自分との間に体験的距離がほとんどなくなっている状態で、からだをまきこんだ五感に開かれた全体的体験」(田嶋 2011:84)を指すものである。そして本人にとっては、それはイメージを体験しているというよりもほとんど現実の、ある意味では現実以上の強い実感を伴う体験となる。田嶋の考案した「壺イメージ法」を始めとして、イメージの性質を活用する心理療法には様々なものがあるが、いずれの場合もこの「イメージ体験」の過程を経ることによって初めて、心の病や思考・感情の停滞を抱える人間に、癒しや成長がもたらされるのだという。(田嶋 2011:82-90)

またイメージ療法はその過程を意図的に導こうとするものであるが、睡眠時に見る夢や催眠状態で生じるヴィジョン等、「イメージ体験」は通常

の覚醒状態においては安定して保たれているイメージ世界の籠が何らかの条件によって緩んだ際に自然発生するものでもあり、その最も強烈なものが、臨死体験や宗教的神秘体験であると考えられる。これらの体験においては、イメージ世界の解体が深部にまで及び、平常時は顕在的なイメージの下にあって容易には表に現われることのない最深層のイメージが露出し、その自律性のままに圧倒的な力を振るうという(田嶋 2011:177-181)。

臨床心理学におけるこうした見解をふまえると、上原の被爆体験を一つの「イメージ体験」として捉えることができる。原爆は、人間の外界(自身の身体も含む)の秩序を一瞬で破壊し、それまで人々が確かなものとして住み慣らしてきた現実世界を様変わりさせた。いつ、どこで、何を、のすべてが突然に断絶され、意識はありながらも「今ここ」を確定することができない。人間の認識能力をはるかに超えた光景が瞬時に立ち現れて身を包み、かつ自身の身体さえ例に漏れず異質極まりないものに変じているのである。『忘れ水物語』の記述を見る限り、上原はその最中であって、眼前に広がる「修羅の巷」も自身の「焼け爛れ、腐乱した五体」も、どこか淡々として眺めている。自身でしばしば当時の状態を「心身離脱」と表現する通り、上原の心はこのとき外界の現実からまた自身の肉体から離脱していたのであろう^{注5}。「私」を持続するためのよすがの一切が、自身にとって有意味なもの全てが一気に奪われたのであるから、それは無理からぬことである。憤激したり恐怖したり悲嘆したり絶望したり感情反応は、出来事の意味を知った者にのみ訪れるものであり、この時の上原にそれは不可能であった。しかし、そのようにして日常の意識世界を構成していたイメージを破壊し尽くされることによって、「在りし日の記憶」が噴出する。潜在的なイメージが剥き出しになって押し寄せてきたのである。上原はそのイメージの圧倒的な誘引力、また自身のひたすら「懐郷心」に任せてそのイメージの世界に「拉致」され「旅立ち」して、「次々とあらわれる在りし日の在りし姿」をまざまざと見、そこに浸りきっていたのである。つまり上原は「在りし日の記憶」の「イメージ体験」を通して懐かしい恍惚の時をくぐり、それによっていのちの「始まり」の実感を得たのだと考えることができる。

3 イメージの民俗学としての心意伝承論との出会い

被爆における「イメージ体験」はあまりに強烈であり、それがために原体験となって、上原のその後の学問を方向づけることになる。

上原は郷里での療養生活の中で、以降の生涯を捧げるテーマを見出したという。それは、人間の心の深層に潜在するイメージの内容と働きの実質を追究すること、言葉や芸能を含む有形無形の民俗文化に保存されている遥かなイメージの記憶を手繰り寄せることで、古来より人間を惹きつけていのちを活性化し、またその体験の共有、実感の共鳴によって人と人とを継いできたイメージを明らかにすることであった。世界や肉体の外形が破壊されても働きを止めず、むしろ一層の透徹さで人間を導き、そのいのちに癒しや活性化をもたらさえる超越的な心の機構。それゆえに外形としてのつながりが断絶されてもなお潜在下で人間と人間を深く通わせ、世代を超える伝承を叶えているもの。上原は自身の被爆を原体験としながら、その実体をつかまえようと考えたのである。具体的な考察対象には、幼少の頃から親しんできた歌舞伎や浄瑠璃等の伝統芸能を選んだ。^{注6}

先述の通り、被爆から約半年後の昭和21年2月、上原は傷口の癒えきらないままに復学し、昭和23年には卒業論文『近松世話物浄瑠璃新論』をまとめて広島高等師範学校を卒業している^{注7}。そして以降、自身のテーマに導かれた放浪を始める。

昭和24年4月、はじめに当時神奈川県にあった坂本学園興國高等学校に赴任、同時に新設の早稲田大学文学部芸術科の聴講生となり、かぶきの美学的研究で著名な郡司正勝に師事している(以降、郡司との子弟関係は上原逝去の時まで続いた)。ついで翌25年4月、東京都立桜水商業高等学校へ勤務先を移し、翌26年4月には東京高等師範学校研究科国語専攻に入学、同年5月には勤務先を玉川学園高等部に移している。さらに翌27年4月には、郡司の勧めによって國學院大学大学院文学研究科日本文学専攻の修士課程に入学し、折口信夫・西角井正慶(1900-1970)・守随憲治(1899-1983)に師事して道行に関する美学的構造の研究を修めた。民俗学における心意伝承の視点を得たのは、この時の折口との出会いを通してであった。

心意伝承とは、そもそも柳田國男(1875-1962)と

折口によって生み出された民俗学の用語であり、^{注8}人間の意識の深層に伝承されていると考えられる普遍的な心の働き方、無形の世界文化を指すものである。個人の心は個人に閉じられたもの、個人の恣意や経験に由来するものという一般的な考え方とは異なり、心意伝承の語は、人間の心の基層には先祖伝来の先験的な内容や様式が息づいており、個人の心はその規矩にしたがって働くものという考え方を提出している。

柳田と折口は、年中行事や祭祀儀礼を始めとした民間の伝承や習俗、芸能や文学を直接的な対象としながら、その考察の集積による最終的な照準を、日本風土における心意伝承の究明に当てていた(柳田1991[初版1935]、折口1971[初出1943])。明治期以降、欧米文化を憧憬し自国の伝統を賤視する知識人や支配者層の価値尺度の浸透によって、日本風土の多くの民俗が抑圧・解体され、人々は連綿と受け継がれてきた生活の基盤を徐々に失っていった。柳田と折口はこうした事態を問題視し、人々の行く末を非常に懸念していた。そのために、心意伝承という視点を提出して遠い祖々より受け継がれている心意の様式を明らかにし、人々のいのちに拠り所を与えようとしたのである。両氏のこの構想が、戦後の上原のテーマと合致した。上原はそこによりやく活路を見出したのである。

柳田(1991)は心意伝承について、「我々が無意識のうちに、過去の生活を継承していることは実に多い。それが時あって顕れるのは、過去の生活そのものがまだ我々の心に伝わっているからである。いかに態様に変化しても、以前の生活の影のごときものが無意識の中に身にくっついているのである。」(柳田1991:317)と述べている。また折口(1971)は、「民族の記憶のありさまは、一個人の記憶力とは違って、だんだん忘れてゆくうちに、俄然として記憶の復活すること、間歇遺伝、隔世遺伝ともいふべきことがある。(中略：引用者)どこかに種が残っていて、それが五百年、千年とたつて、俄然として芽を出すのである。」(折口1971:14)と述べている。被爆によって自らの身体も含めた有形の拠り所を失った上原の目に、近代以前からの無形の伝承を照射しようとする心意伝承論は、人間生命のより深く確かな拠り所を探るものとして映ったにちがいない。折口は出会いからわずか1年半後の昭和28年9月に死没するが、

上原はその志を継いで昭和29年4月には博士課程に進学し、民俗芸能や歌舞伎・浄瑠璃などの芸能の世界における心意伝承の調査にあたり、生涯をかけて研究し続けていくことになる。

4 「イメージ体験」をうながす教育の着想

田嶋(2011)によると、「イメージ体験」に至る過程では、「つながりの自覚」と「個の自覚」の併存とでも言うべき現象、つまり他者とのつながりを実感し、またそのつながりの中にしっかりと位置づけられている、あるいは守られている自分を発見する状態が生起するのだという(田嶋2011:78-80)。被爆体験における「つながりの自覚」や「個の自覚」の有無について、上原自身がそれとしてはっきりと語っている箇所はない。しかし、上原がその体験ののち人間の普遍的なイメージとその伝承をテーマとし、一方では心意伝承研究を、もう一方では共時的／通時的なつながりの実感を与えるイメージ教育を着想し、生涯にわたって探究を続けたこと自体に、そうした自覚とそれを重視する視点の明瞭な表れを認めることができる。

上原は亡くなる前年、平成7年8月6日に「平塚原爆被災者の会」の主催で行われた講演会において、自身の被爆体験に基づいて教育への提言をおこなっている。その内容を整理すると、およそ以下の三点にまとめることができる。

①被爆者がまず伝えるべきは、原爆の悲惨さや反戦反核の意志ではなく、被爆の際に人間の意識がどのような体験をしたかである。

②原爆は、外界の秩序とそれを認識する意識を一瞬で破壊し、それによって人間の潜在的なイメージの世界、あるいは潜在的な心の働きを前面に立ち上がらせた。

人間の潜在的なイメージの世界とは、一言でいえば胎児期や幼少期の記憶であり、潜在的な心の働きとは、それを懐かしみ、その時へ還ろうとする欲動である。

③近代の教育は、個人を単位として命を捉える「点の教育」を行ってきた。しかし今日必要なのは、個人を超えて伝承／共有されてきた人間の潜在的な心の働きやイメージの世界を明らかにすることであり、子どもたちにそれとつながる体験を与え、つながりの実感と自覚

をもたらす「線の教育」を行うことである。

以下、それぞれの点について補足しつつ考察を加えていく。

(①)戦後の上原が、反戦反核の運動に参加することは一切なかったという。無論そうした運動の重要性を否定する気はなく、むしろ熱心な運動家たちに対するすまなさのようなものを抱え続けていたが、上原にはそれよりも重視すべきことがあった。それが、被爆の際に人間の心がどのような体験をしたかを伝えることだったのである。

(②)上原は、原爆によって日常の意識世界を構成していたイメージを破壊し尽くされることによって、自身の潜在的なイメージの世界あるいは潜在的な心の働きが前面化する体験をした。前節で考察した「イメージ体験」である。

人間の心には深層が存在し、常時には表層に上ることのない胎児期や幼児期の原初的なイメージが息づいていること、しかし何かの契機に平常の意識を構成しているイメージの籠が緩み継ぎ目がほぐれた際には、その潜在的なイメージが意識上にこみ上げてくること、あるいはそのイメージを懐かしみ、そこへ還らんとする欲動が生じること、そしてそれらの訪れを拒まずそのままに受容して深く体験するとき、その主体は懐かしさや安らぎに包まれ、やがていのちの更新や活性化を実感すること等。上原は被爆を通して、人間のイメージの機構がいかん作用するものであるのか、その「イメージ体験」が主体にいかなる効用をもたらすものであるのかを、身を以て知ったのである。

(③)そしてその体験を機に、上原は近代教育への疑念を抱くようになる。近代以降、特に敗戦後に強化された、個人を単位とする「点の教育」への疑いである。

玉川大学を定年退職する1993年3月に刊行した『いのちの教育を再び—基層教育学試論集』の冒頭に、上原は以下のように書き付けている。

近代に入って、特に敗戦直後、一夜にして、我々は個人の生命を単位とすることを常識化する教育は徹底を極めた。価値転換を是非も訂すことなく果たし終えた時、茫然自失しているのがわが民族なのではなかったか。すでに、あれほど大切にしていた「家」は消滅していた。神仏も美術品でしかな

かった。日本人は生命の拠り所を失ったのではないか。(中略)

戦後のアメリカ教育を移植した当のアメリカ人も、今ではあれは誤算であったと思っははいまいか。原罪観念を持たない異教徒に与えた個人主義は、資本主義社会の競争原理の神兵を作るにしか訳に立たなかったかと。基督教徒には「愛」がある。いまの日本人には何があるのか。かつての「義理」も「人情」もない。ましてや「武士道」があるはずもない。生命の基層部は全く空洞化していたのである。(上原 1993:2)

ここには、第3章で触れた柳田と折口の視点に重なる問題意識が示されている。明治期以降、国家が近代化を押し進めていく中で、また特に戦後の復興をかけた社会的動向の中で、それまで人々の生活に有形無形の形で連綿と受け継がれていた民俗文化は急速に捨て去られまた抑圧されていった。特に上原が問題視しているのは、アメリカから与えられたにわか仕立ての個人主義である。アメリカの個人主義には、キリスト教の「原罪」や「愛」に代表される信仰の背骨がある。しかし古来より個のいのちの拠り所とされてきた「家」や「神仏」をないがしろにし、個の情動を公共の道徳へと調えるための「道」や「義理人情」さえ煩わしく思うようになった日本人に、それに値するものがあるはずもなかった。人と人との関係性や継承性に対する自覚や配慮を欠いた戦後日本の個人主義は、それゆえに一時の解放感を与えもしたであろうが、また一方で人々の「生命の基層部」を空洞化させ「生命の拠り所」奪って、果てのない孤独感をもたらしたのである。

教育現場もまた時代の例外ではなかった。個人はもとより関係性の中に生を授かり、関係性の中に生きていくのであって、大河の一滴であることによって初めて己を実感し、そのむかう方角を自覚して自らの意志をいただくものである。しかし戦後の教育は日本の復興をかけて資本主義経済に参与するために、子どもたちを調和的なつながりから引き剥がして競争原理の中に投げ込み、潜在的な敵対関係につないでしまった。そこでは他者や過去の自分との差こそが価値であり、他者と同質であることや過去と変わらないことはゼロに等しく評価されなかった。個人としての努力や進歩の

みが評価の対象となる、徹底した「点的教育」が行われたのである。

そのような時代の流れを見つめながら、上原は以下のようにつづける。

教育学は何のために存在するのか。人間生命の基層を対象とせぬ教育学に人々の関心が向けられない。(中略)親から子へ、子から親への、個人を超える継承的生命を想わない限り、日本人の生命観は衰耗し破綻する。(上原 1993:3)

ここで上原が、教育学が対象とすべきであると述べている「人間生命の基層」また「個人を超える継承的生命」とは、上原が自身の被爆体験から重視した心意伝承の実体、すなわち万人の心の基層を成して古来より人間を惹きつけいのちを活性化し、その体験の共有や実感の共鳴によって人と人とを継いできた普遍的イメージのことに他ならない。

上原は、現代の子どもたちに顕著であると言われる自信の欠如や無気力さ、人間関係に対する不安の強さ等の問題の根本に、そうしたイメージとの隔絶を見ていた。その隔絶のために、命脈の一としての安定した自己同一感や他者との連帯感が希薄化し、気力の回復も起らないと考えたのである。そのために上原は、個人を超えて伝承／共有されてきた人間の潜在的な心の働きや心象世界を明らかにし、子どもたちにそれらとつながる体験を与え、自らが「継承的生命」としていのちの大河にしっかりとつながっているのだという実感をもたらす「線の教育」を着想し、その必要を訴えたのであった。

5 心意伝承研究と国語教育研究の両輪—イメージを軸として

以上、第I期における上原の被爆体験を「イメージ体験」を手がかりに考察し、後に心意伝承研究と国語教育研究を結ぶことになる視点や問題意識を明らかにした。ここでは、それが続く第II期・第III期においてどのような学究へ発展していったのか、上原の心意伝承研究と国語教育研究の有機的連環を捉えたい。

心意伝承研究の要点については、第3章に述べた通りである。上原はかぶきや浄瑠璃や能、また

各地の民俗芸能や祭祀儀礼を中心的な考察対象としながら、そこに保存されている遙かなイメージの記憶を手繰り寄せることで、古来より人間を惹きつけていのちを活性化し、またその体感の共有、実感の共鳴によって人と人とを継いできた普遍的なイメージの実体を明らかにしようと努めた。

そしてその探究はそのまま国語にも向けられた。国語というよりも母語という方がふさわしいが、上原は言葉を、またその継承行為を、体感や感情や思考を含むイメージの、身体的振動による「種族的共鳴反応」として捉えた。言葉は文字であるより先に音声である。音声とは動物がその身体を振動させることによって発するものであり、特に人間の場合それに体感や感情や思考が託されている。つまり言葉とは、人間の体感や感情や思考のイメージを、(それはそもそも動的なものであるから、その動性に従って)身体の振動音に変換したものであって、ある特定の言語を継承する行為とはすなわち、その種族に伝わる身体的振動に対する身体的共鳴を生じさせることに他ならない(上原 2011:230)。

一例として、日本語の「い」音についての言及をとり上げてみる。上原によると、「いやあ」と「やあ」とを較べてみたとき、「いやあ」の方が大きな感動がこめられていることを大方の日本人が聞き分けることができる。聞き分けるばかりではない。重いものを持ち上げるとき、「よいしょ」と言うより「いよいしょ」と発音した方が力を発揮できることを、日本人は感覚的に知っている。副詞「いよいよ」は決して「だんだん」に替えられるものではなく、目に見えず音に聞えず手でふれることもできない生命力の肉迫を表している。「いのち」は「い」の「ち(霊格を表す)」、「祝う」は「い」延う、「祈る」は「い」呪る、「息吹く」は「い」吹く、「勇む」は「い」さむ、「勢い」は「い」気負いであって、すべてその生命力の体感イメージが、「い」という発音に託されて表出された結果として生み出された言葉である。(上原 2011:242-243)

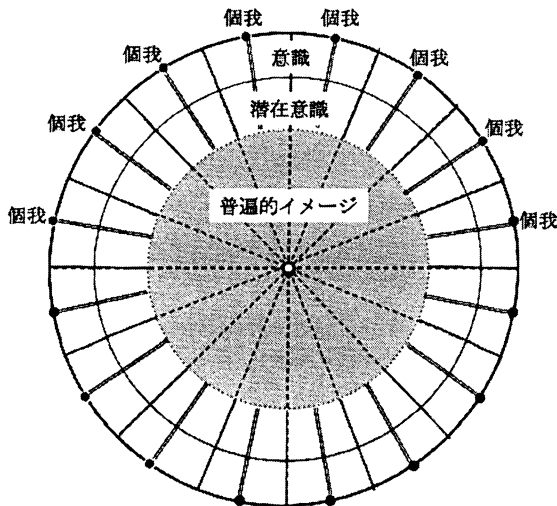
言葉を継承することは、その音声に保存された人間の体感や感情や思考のイメージを、その音声の振動に共鳴することによって身体的に把握することであり、また自らの体感や感情や思考のイメージを、その振動音に転換して発していくことで

ある。上原はそうした考えから、今日の文字言語優位の国語教育を問題視し、音声言語教育の優先性を主張したのである。「心意伝承としての国語」(上原 1983[初出 1982])という論文を上原は遺しているが、正にその題目の示している通り、上原にとって母語の継承行為は心意伝承の最たる事例であって、国語教育は心意伝承の問題であり、心意伝承研究はそのまま国語教育研究でもあったのである。

本稿ではとり上げる余白がないが、国語科教師となった門下生たちを支えるために上原が 1968 年に設立した「児童の言語生態研究会」の実践が、子どもたちの「言語生態」すなわちイメージの生態研究を基本とし、また心意伝承研究に基づく開発教材によって子どもたちの「イメージ体験」を促す場として展開されてきたことは、難波(2003;2011)や秦(2005;2013;2014)等にすでに考察されている通りである。第 4 章でとり上げた講演の中で、上原は近代教育の根本問題を継承的生命としての人間観の希薄化にみとめ、個人を超えて伝承/共有されてきた普遍的なイメージとつながる体験を与え、いのちの活性化やつながりの実感をもたらす教育の必要性を述べていた(要旨③)。その必要に応じるべくして「児童の言語生態研究会」の実践は展開されていたのである。

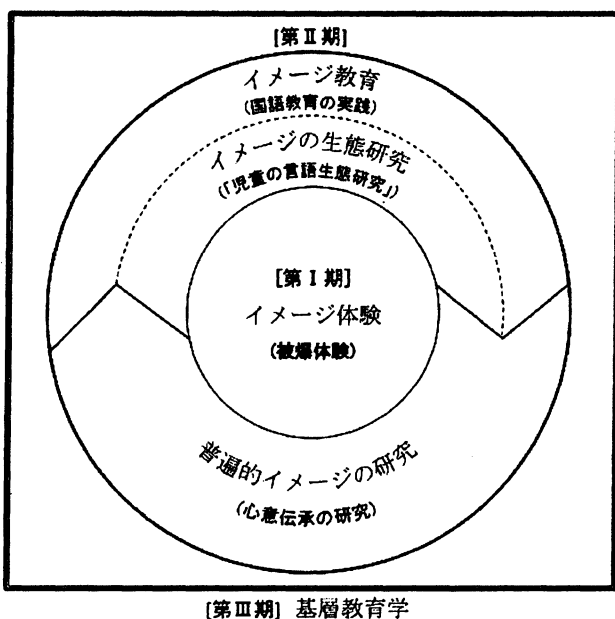
第Ⅱ期の玉川大学在職中、上原は第Ⅰ期の被爆体験を通して得た視点を心意伝承研究と国語教育研究の両分野で展開し、両者のあいだに有機的な連環を生み出しながら深めていったと言える。言葉がイメージの生成継承によるものである以上、上原にとって国語教育とはイメージ教育の意であり、子どもたちの潜在意識に息づく普遍的なイメージを呼び覚まして「イメージ体験」を促し、いのちの活性化あるいは他者との連帯感や命脈の一としての自己同一感がもたらされるよう計らうこと、その実感から発されるものとしての言葉を育むことに他ならなかった(【図 1】)。そしてそうした国語教育の実践を発展させていく基盤研究として、心意伝承研究は欠かせないものだったのである。被爆の体験は上原にとって忌むべきものであったにちがいないが、上原がたびたび呪縛や呪文・呪詛という言葉によって表現する通り、それは上原に圧倒的な影響を与えつづけ、その結果として心意伝承研究と国語教育研究の両輪の轍が遺

されたのだと言える。



【図1 心意伝承研究に基づく
国語教育(イメージ教育)の展望】

上原から見れば、視点ははじめから一つであった。しかし、その視点をして両分野をまたがせたことによって、上原の探究は壮大なヴィジョンに発展することになった。第Ⅲ期、玉川大学を退職するにあたって上原が提出した「基層教育学」のヴィジョンが、それである(【図2】)。人間生命の基層を成す普遍的イメージの研究に基づくイメージ教育を探究する学、その定位、上原の生涯の集大成であった。そこではもはや「国語教育」という言葉は用いられていない。国語教育学は「基層教育学」であるべきだとする上原の意志が表明されてのことである。



【図2 基層教育学の形成過程と有機的構造】

上原は1996年4月に急逝したが、そのヴィジョンと遺志は「児童の言語生態研究会」の会員らに受け継がれ、現在も実践研究がすすめられている。

5 まとめ

国語の内に持ち伝えられてきたイメージを子どもたちに伝承し、その心身に内発するイメージと縊り合わせることで自らの人生を支え導く言葉の生成を叶えていくこと。国語教育をそのような試みとして捉えるとき、その基盤に心意伝承研究を据えることの意義は明らかになる。すなわち、子どもたちの潜在意識に息づく普遍的なイメージを呼び覚まして「イメージ体験」を促すこと、それを通していのちの活性化あるいは連帯感や自己同一感をもたらすこと、その実感に基づく言葉を生成させていくこと、心意伝承研究の成果を導入することによって国語教育はそうしたヴィジョンを持つことが可能になり、また具体的な手法をもってそれを実践していくことができるのである。

今後の課題は、以下の通りである。

- ① 上原が心意伝承研究や子どものイメージの生態研究を通して見出した普遍的イメージについて整理すること。
 - ② 心意伝承研究に基づく国語教育の事例を考察し、実践上の課題を明らかにすること。
- 以上について、引き続き取り組んでいきたい。

【注】

1 上原の講演会「人間らしく育つために」(1982年9月18日開催)の文字記録に拠る。

講演録(「児童の言語生態研究会」提供。)

2 1968年の設立以降、1996年の死没まで上原が主宰を務めた幼稚園・小学校の教員を中心とした国語教育研究会。会誌『児童の言語生態研究』は現在17号まで発刊。現在も上原の門下生によって、月例会や公開研究授業等の活動を続けられている。

3 「学校人脈⑩歌舞伎学者」(昭和54年9月19日付「神戸新聞」記事)に拠る。また注1の記録に拠ると、その背後には上原が教員になることを望む父親の影響もあったという。

4 注1に同じ。

5 「1995[平成7]年忘年会」発話録に拠る。

6 ある目的地に達するまでの過程を表現する日本の文芸、芸能上の表現形式のこと。

7 注3に同じ。

8 折口信夫(1971)は、「心意伝承」の命名を行い、研究の先鞭をつけたのは柳田國男であるとしているが、柳田は自著において「心意伝承」の語を用いておらず、「心意現象」(ときに「無意識伝承」)の語を用いている。折口は「心理伝承」の語を用いることもあったが、多くは「心意伝承」の語を用いている。(この辺りの経緯及び両氏の意図については、上原輝男(1987)に詳察がある。)「伝承」か「現象」かの名称の違いは厳密には重要な点であるが、本稿では、両氏がそれぞれの語で指し示そうとした事象を概ね重なるものとみなし、また折口最晩年の門弟であった上原の用語に従って、一貫して「心意伝承」の語を用いた。

【主要参考文献】

- 上原輝男(1968)『小学校の国語かくあるべき—現代国語教育の盲点と批判』学芸図書
- 上原輝男(1972)『藝談の研究—心意伝承考』早稲田大学出版部
- 上原輝男(1974)『小学校国語教材研究序説』学芸図書
- 上原輝男(1983)『感情教育論—子どもの言語生態研究』学陽書房
- 上原輝男・藤岡喜愛・飯住良夫・武村昌於・中川節子・小林照子(1985)「子どものイメージ」(岩田慶治編著『子ども文化の原像』pp.115-205, 日本放送出版協会)
- 上原輝男(1987)『心意伝承の研究—芸能篇』桜楓社
- 上原輝男(1989)『忘れ水物語—ある被爆者の記憶』(普及版)主婦の友社
- 上原輝男(1991)『小学校の国語の授業はこうする—感情・思考・構え編』学芸図書
- 上原輝男(1993)『いのちの教育を再び—基層教育学試論集』明治図書
- 上原輝男(1995)『日本人の心をほどく かぶき十話—「風流(かぶき)」の「情念(こころ)」と「行動(はたらき)」』オリジン社
- 上原輝男(1998)『小学校国語の授業はこうする—用具言語編』学芸図書
- 上原輝男(2006)『曾我の雨・牛若の衣裳—心意伝承の残像』暮しの手帖社
- 上原輝男(2011)『続感情教育論—心の琴の音の鳴

る子に』児童の言語生態研究会

- 折口信夫(1971)『折口信夫全集ノート編』第七巻, 中央公論社
- キューブラー・ロス, E(1971[原著 1969])『死ぬ瞬間—死にゆく人々との対話』読売新聞社
- キューブラー・ロス, E(1977[原著 1975])『続・死ぬ瞬間—最後に人が求めるものは』読売新聞社
- 田嶋誠一(2011)『心の営みとしての病むこと—イメージの心理臨床』岩波書店
- 難波博孝(2003)「児言態の実践と理論の影響力」, 中国四国教育学会第55回大会資料
- 難波博孝(2011)「解説」(上原輝男著『続感情教育論—心の琴の音の鳴る子に』, pp.305-315, 児童の言語生態研究会)
- 日本民俗研究体系編(1988)『日本民俗研究体系—第八巻・心意伝承』國學院大學
- 秦恭子(2005)「自分を認める力を培う国語教育の探究—〈イメージネーション〉とのつながりを手掛りとして」2004年度広島大学大学院教育学研究科修士論文
- 秦恭子(2013)「「イメージ体験」としての文学教育—「児童の言語生態研究会」の『きつねの窓』実践からの展望」, 『初等教育カリキュラム研究』, 第2号, pp.63-77, 広島大学大学院教育学研究科初等カリキュラム開発講座
- 秦恭子(2014)「初等国語科における俳句創作の指導方法に関する一考察—「児童の言語生態研究会」の実践を事例として」(『日本教科教育学会誌』, 第37巻第3号, pp.41-50, 日本教科教育学会)
- 柳田國男(1991[初版 1935])『柳田國男全集 28』筑摩書房
- ### 【主要参考資料】
- 「学校人脈⑩歌舞伎学者」(1980[昭和 54]年 9月 19日付「神戸新聞」)
- 「人間らしく育つために」(1982年 9月 18日開催)講演録(「児童の言語生態研究会」提供。)
- 「上原輝男教授略年譜」(「児童の言語生態研究会」提供。1993年の退職記念祝賀会にて配布。)
- 「平塚原爆被災者の会(1995年 8月 6日開催)」講演録(「児童の言語生態研究会」提供。)
- 「1995[平成 7]年忘年会」発話録(「児童の言語生態研究会」提供。)